

母親の学歴と幼児の テレビ視聴に関する一考察

— 幼児の家庭におけるテレビ視聴調査から —

岸 正 寿

1. はじめに

人間は生まれてすぐ、テレビをはじめとする映像メディアに接触する。多くの家庭では、幼児は母親に見守られて毎日を過ごしなが、母親のしているテレビの音を聞き、画面のほうに顔を向ける。子どもは否応なくテレビにさらされているのである。幼児の家庭におけるテレビ視聴に家庭環境、特に母親がどのような影響を及ぼすのであろうか。

NHK放送文化研究所の“子どもによい放送”プロジェクトの調査によると、就学前児のテレビ接触時間は平日1日平均で、0歳で3時間15分、さらに1歳で幼児のピークである3時間23分、2歳で2時間44分、3歳で2時間30分、4歳で2時間14分、5歳で2時間10分だという（NHK放送文化研究所、子どもによい放送プロジェクト 2013）。この接触時間はテレビ接触時間だけなので、ビデオ、DVD、HDD、ゲームの映像メディア全体の接触時間にすると0歳で3時間35分、さらに1歳では幼児のピークである4時間2分となっている。子どもたちのテレビ接触時間は決して少ない数字とは言えないであろう。

中井・西村・菅原（2010）は、“子どもによい放送”プロジェクト・中間総括報告書から、母親のテレビ接触・視聴時間は幼児のテレビ接触・視聴時間の最大の規定因であることを指摘している。つまり、母親が幼児のテレビ接触・視聴時間をコントロールしていることが伺える。幼児のテレビ視聴は母親のリテラシーが大きな影響を与えていると考えられる。

菅原・向田・酒井・坂元・一色（2007）は、3歳児を対象として子どもの社会性とテレビ視聴の関連を検討した結果、親のテレビ共有機能は協調性・共感性および能動性・自己主張性得点と弱い関連が見られたこと、親の統制機能の高さも協調性・共感性と関連が見られたことが明らかになり、母親のフィルタリング機能が多いほど、3歳児の協調性・共感性が高

いことを示唆している。

本稿の目的は、幼児の家庭におけるテレビ視聴に関する質問紙調査の結果に基づいて、母親のリテラシーを測る指標を母親の学歴に求め、母親の学歴が母親のテレビ視聴、とりわけ幼児に対してのテレビ共有機能や幼児のテレビ視聴のあり方にどのような影響を与えているのかを検討することである。

2. 先行研究の検討

1) 幼児のテレビ視聴と発達

乳幼児を対象とするテレビの影響研究では、1999年にアメリカの小児科学会 (American Academy of Pediatrics) が “Television and the Family” と題する子どものテレビ視聴に関する家庭の役割への提言を行い、テレビ接触時間に関しては2歳以下の子どもたちのテレビ接触は推奨できないこと、また年長児においても1日1～2時間以内の教育的番組の視聴に留めることが望ましいとしている。また、こうした動きを追って、2004年には日本小児科学会が「乳幼児のテレビ・ビデオ視聴は危険」という提言を発表した。このように、乳幼児期のメディア接触について強く警鐘を鳴らす発言も増えている (片岡 2002 ; 片岡 2008)。

Zimmerman & Christakis (2005) は3歳未満でのテレビ視聴時間が多い子どもほど就学時の言葉の読みや理解、数字の記憶などの成績が劣るという報告をしている。また、齋藤 (2008) は、1歳6カ月児を対象として、精神発達指標、生活、テレビ・ビデオ視聴時間の関係を調べた結果、テレビを見ている時間帯が長くなることに伴って、精神発達や外遊びにも影響が出てくることを示唆している。

服部・足立・嶋崎・三宅 (2004) は、幼児のテレビ視聴と生活習慣について調査した結果、テレビ視聴時間が長い幼児ほど、就寝時刻が遅く、短時間睡眠で、かつ就寝・起床のリズムが不規則で、生活リズムが安定していない様子を報告している。また、テレビ視聴時間が短い幼児ほど睡眠時間が長く、朝食をきちんと食べる傾向があり、朝の排便習慣が形成された幼児の割合が高いことを報告している。幼児のテレビ視聴時間をコントロールするためには、親が子どもの生活リズムや生活習慣作りへの意識を高め、その意識を持続させる必要があると指摘している。

2) 幼児のテレビ視聴と母親の果たす役割

NHK放送文化研究所による2～6歳を対象とした幼児視聴率調査(渡辺 2014; 安楽 2013; 関根 2012)、“子どもによい放送”プロジェクトの中間総括報告書(2010)で子どものテレビ視聴時間を左右する要因として、養育者のテレビ視聴時間と子どものテレビに対する視聴制限をあげている。また、養育者のテレビ観も子どものテレビ視聴に影響することを示している。

向田(2003)は、乳幼児のメディア接触は親の果たす役割が大きいことを指摘している。メディアの悪影響を防ぎ、メディアからの学びを促進するには、親の媒介(mediation)が非常に重要であることを示している。子どもの理解を助け、正しい現実認識を行うためにも、テレビやビデオ視聴には親の媒介が欠かせないと指摘している。

3) 幼児のテレビ視聴と母親の学歴

幼児のテレビ視聴に母親の影響が大きいことは先行研究からも明らかである。だが、幼児のテレビ視聴にもたらす母親の学歴に関しては、母親の学歴が影響するもの、影響しないものと相反する結果が示されていることは興味深い。

中井・西村・菅原(2010)は、“子どもに良い放送”プロジェクト中間総括報告書から、0歳～5歳の乳幼児期のテレビ接触を規定する要因として、1歳、4歳、5歳で家族の経済的ゆとりや母親の学歴に関する変数が有意な関連性を示したことを指摘している。

佐藤・藤田(2005)は、学歴とテレビの関係性について実証的調査を踏まえて、親の学歴が低いほどテレビが「欠かせない」存在となっており、テレビは低学歴者に重視されていることを指摘している。「文字リテラシーが少ない人にもアクセスしやすいのがテレビ」で、それゆえ「文字リテラシーが少ない人ほどテレビは基調で希少なメディア」だと解釈すべきで、テレビは大衆階層社会の大衆性の方を代表するメディアであると指摘している。

深谷(1983)が小学校4～6年生を対象に行った調査では、視聴時間の長い子どもを持った母親ほど、テレビ好きの傾向があることを示した。さらに、新聞、雑誌、書物などから情報を仕入れたり、スポーツや文化活動に参加したりする母親のもとでは、テレビ視聴時間の短い子どもが多く育ち、逆にそういった学習意欲に乏しい母親のもとでは長時間視聴が多かつ

たことが認められた。また、NHK放送文化研究所が1979年に行った「家族とテレビ」調査では、学歴の高い母親ほどテレビ視聴時間が短く、その子どもの視聴時間も短かったことを指摘している。

ところが、Christakis (2004) は、乳幼児期のテレビ視聴量が多いほど7歳時点でADHDなどに関連する注意の問題が生じる割合が多いことを示したが、この研究データに収入や母親の学業成績などの要因を加えて再分析したところ、テレビ視聴時間の効果が消えてしまったことを指摘している (Forster & Watkins 2010)。

3. 調査方法

本稿で用いた質問紙調査「幼児の家庭におけるテレビ視聴調査」は、東京都生活文化局「子どものテレビ視聴の様態に関する調査研究」(1986年)を参考にし、独自の調査項目を追加して実施した。

1) 対象と方法

調査対象は、神奈川県、東京都、埼玉県の私立幼稚園5園と公立幼稚園2園に通園する3歳児・4歳児・5歳児の保護者830名とした¹⁾。2013年11月に幼稚園を通して調査票(無記名式)を配布し、数日後回答された用紙を幼稚園で回収を行った。回収数は542であり、このうち有効回答数492名(有効回答率59.3%)を分析対象とした。

2) 調査項目

①フェースシート

幼児の年齢、幼児の性別、家族構成、母親の就業の有無、母親・父親の職種、母親・父親の学歴を求めた。

②質問シート

母親と幼児の平日、休日における(DVD、HDDによる録画も含む)一日の平均視聴時間、幼児の好きなテレビ番組名、幼児の視聴している番組を母親と一緒に見ることがあるか、幼児は母親が見ている視聴している番組と一緒に見ることがあるか、テレビ視聴規制の有無、食事の際のテレビ視聴の有無、母親のテレビに対する考え方(「テレビは幼児の知識を豊かにする」「テレビは幼児に必要な以上のことを教えずぎる」「テレビは幼児の言葉の表現を豊かにする」「テレビは幼児の豊かな情操を養う」「テレビは幼

児の行動や言葉遣いを乱暴にする」「テレビは幼児の友達との人間関係が深まる」「テレビは幼児のコミュニケーション能力が低下する」「テレビは幼児の生活の区切りをつけるのに役立つ」「テレビは幼児の生活のリズムを乱す」)について、「そう思う」「そう思わない」「どちらとも思わない」の3件法で尋ねた。以上のすべての分析にSPSS (version19.0) を使用し、クロス集計、 χ^2 検定を行った²⁾。統計的有意水準は5%に設定した。

③回答者の属性

母親の年齢別は、25歳～29歳30名(6.1%)、30歳～34歳127名(25.8%)、35～39歳187名(38.0%)、40歳～44歳110名(22.4%)、45～49歳21名(4.3%)、50歳以上は0名(0%)、不明は17名(3.5%)であった。平均年齢は36.66歳(25歳～49歳)であった。調査の対象となった幼児の性別は、男児223人(45.3%)で女児は231人(47.0%)であり、不明は38人(7.7%)であった。年齢別は、年少157人(31.9%)で年中156人(31.9%)年長178人(36.2%)不明は1人(0.2%)であった。

4. 結果

1) 家庭でのテレビ視聴規制の有無と幼児のテレビ視聴時間

表1、表2は、「家庭でのテレビ視聴規制の有無」と「幼児の平日・休日テレビ視聴時間」との関係を示したものである。「家庭でのテレビ視聴規制あり」の幼児の平日・休日テレビ視聴時間は短時間視聴児の割合が多く、長時間視聴児の割合が少なかった。「家庭での視聴規制なし」の幼児の平日・休日テレビ視聴時間は、長時間視聴児の割合が高く、短時間視聴児の割合が低かった。この結果、幼児のテレビ視聴時間は、家庭でのテレビ視聴規制が幼児のテレビ視聴時間の長短に影響を与えている傾向がみられた。母親が幼児のテレビ視聴時間を規制することについては、幼児視聴率調査・子どもによる放送プロジェクトの中間総括報告書の先行研究の結果と一致していた。

表1 家庭でのテレビ視聴規制の有無と幼児の平日テレビ視聴時間

	1時間未満	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上	合計
規制あり	66(19.0%)	140(40.2%)	103(29.6%)	31(8.9%)	8(2.3%)	348(100%)
規制なし	9(6.6%)	56(40.9%)	43(31.4%)	19(13.9%)	10(7.3%)	137(100%)
合計	75(15.5%)	196(40.4%)	146(30.1%)	50(10.3%)	18(3.7%)	485(100%)

$$\chi^2(4) = 18.85, p < .05, V = .197$$

表2 家庭でのテレビ視聴規制の有無と幼児の休日テレビ視聴時間

	1時間未満	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上	合計
規制あり	70 (20.1%)	119 (34.1%)	90 (25.8%)	42 (12.0%)	28 (8.0%)	349 (100%)
規制なし	7 (5.1%)	44 (31.4%)	37 (27.0%)	19 (13.9%)	30 (21.9%)	137 (100%)
合計	77 (15.8%)	163 (33.5%)	127 (26.1%)	61 (12.6%)	58 (11.9%)	486 (100%)

$$\chi^2(4) = 30.17, p < .05, V = .249$$

2) 「母親学歴と幼児番組を母親が子どもと一緒に視聴するか」「大人の番組を母親と幼児と一緒に視聴するか」

表3は、「母親学歴」と「幼児番組を母親が子どもと一緒に視聴するか」との関係を示したものである。低学歴群の母親は幼児の視聴番組と一緒に見ている割合が高いが、逆に高学歴群の母親は幼児の視聴番組と一緒に見る割合が低いことが明らかとなった。この結果、低学歴群の母親は幼児と一緒にテレビを長時間「ながら」視聴をしている傾向がみられるが、高学歴群の母親は幼児と一緒にテレビを視聴する時間が短く、母親が幼児にテレビを「選択的」視聴をさせている傾向がみられた。

表3 母親学歴と幼児番組を母親が子どもと一緒に視聴するか

	よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	合計
中学・高校	49 (45.4%)	54 (50.0%)	3 (2.8%)	2 (1.9%)	108 (100%)
短大・専門	76 (37.4%)	105 (51.7%)	14 (6.9%)	8 (3.9%)	203 (100%)
大学・大学院	57 (33.9%)	80 (47.6%)	21 (12.5%)	10 (6.0%)	168 (100%)
合計	182 (38.0%)	239 (49.9%)	38 (7.9%)	20 (4.2%)	479 (100%)

$$\chi^2(6) = 13.61, p < .05, V = .119$$

表4は、「母親学歴」と「大人の番組を母親と幼児と一緒に視聴するか」との関係を示したものである。

低学歴群の母親は母親の視聴している番組を幼児と一緒に視聴する割合が高いが、逆に高学歴群の母親は母親の視聴している番組を幼児と一緒に視聴する割合は低かった。高学歴群の母親は、大人向けの視聴番組を幼児に視聴させないように規制していることが示唆された。このことから、佐藤・藤田の先行研究で示されていたように、テレビは低学歴群に重視されている点が一致していた。また、文化的教養が高い家庭では、大人のテレビ番組を視聴するより、他の遊びや手立てを幼児に提示していることが推

測される。

表4 母親学歴と母親の番組を幼児と一緒に見る

	よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	合計
中学・高校	31 (28.7%)	50 (46.3%)	18 (16.7%)	9 (8.3%)	108 (100%)
短大・専門	31 (15.3%)	108 (53.2%)	35 (17.2%)	29 (14.3%)	203 (100%)
大学・大学院	19 (11.3%)	74 (44.0%)	32 (19.0%)	43 (25.6%)	168 (100%)
合計	81 (16.9%)	232 (48.4%)	85 (17.7%)	81 (16.9%)	479 (100%)

$$\chi^2(6) = 27.32, p < .05, V = .168$$

3) 母親学歴と幼児の食事の際のテレビ視聴

表5は、「母親学歴」と「食事の際のテレビ視聴」について示したものである。低学歴群の母親は、食事の際の視聴ありの割合が高く、逆に視聴なしの割合が低かった。高学歴群の母親は、食事の際の視聴なしの割合が高く、逆に視聴ありの割合が低かった。この結果、低学歴群の母親は食事の際も幼児と一緒にテレビを視聴していることが予測され、それも「ながら」視聴で長時間視聴をしていることが推測される。

高学歴群の母親は、食事の際の視聴なしの割合が高く、視聴ありの割合が低いので、母親が幼児のテレビ視聴を上手くコントロールし、「選択的」視聴で短時間視聴をさせていることが推測される。

表5 母親学歴と幼児の食事の際のテレビ視聴

学歴	視聴あり	視聴なし	合計
中学・高校	62 (60.2%)	41 (39.8%)	103 (100%)
短大・専門	100 (51.0%)	96 (49.0%)	196 (100%)
大学・大学院	67 (41.4%)	95 (58.6%)	162 (100%)
合計	229 (49.7%)	232 (50.3%)	461 (100%)

$$\chi^2(2) = 9.18, p < .05, V = .141$$

4) 母親学歴と母親のテレビに対する考え方

表6は「母親学歴」と「テレビは幼児に豊かな情操を養うと思うか」との関係を示したものである。

低学歴群の母親は、テレビは幼児に豊かな情操を養うと考えている割合が高いが、高学歴群の母親は、テレビは幼児に豊かな情操を養わないと考えている割合が高い傾向がみられた。

この結果、低学歴群の母親はテレビが幼児へ与える影響を肯定的に捉えている傾向がみられ、高学歴群の母親はテレビが幼児へ与える影響を否定的に捉えている傾向がみられた。このことが、母親のテレビ視聴規制、幼児の視聴している番組を母親と一緒に視聴するか、母親の視聴している番組を幼児と一緒に視聴するかの結果に繋がっていると考えられる。母親のテレビ観が幼児のテレビ視聴を規定することについては、子どもにより放送プロジェクトの中間総括報告書の先行研究の結果と一致していた。

表 6 母親学歴とテレビは幼児の豊かな情操を養う

	そう思う	そう思わない	どちらともいえない	合計
中学・高校	37 (34.3%)	13 (12.0%)	58 (53.7%)	108 (100%)
短大・専門	45 (22.0%)	41 (20.0%)	119 (58.0%)	205 (100%)
大学・大学院	29 (17.3%)	39 (23.2%)	100 (59.5%)	168 (100%)
合計	111 (23.1%)	93 (19.3%)	277 (57.6%)	481 (100%)

$$\chi^2(4) = 13.17, p < .05, V = .116$$

5. 考察と今後の課題

本稿で用いた質問紙調査「幼児の家庭におけるテレビ視聴調査」の結果から、明らかになった知見は以下の通りである。

1) 家庭でのテレビ視聴規制ありの幼児の平日・休日テレビ視聴時間は短時間視聴児の割合が高く、長時間視聴児の割合が低い傾向がみられた。逆に家庭でのテレビ視聴規制なしの幼児の平日・休日テレビ視聴時間は、長時間視聴児の割合が高く、短時間視聴児の割合が低い傾向がみられた。家庭でのテレビ視聴規制が幼児のテレビ視聴時間の長短に影響を与えていることが示唆された。

2) 低学歴群の母親は幼児の視聴番組を一緒に見ている割合が高いが、高学歴群の母親は幼児の視聴番組を一緒に見る割合が低いことが示唆された。

3) 低学歴群の母親は母親の視聴している番組を幼児と一緒に視聴する割合が高いが、高学歴群の母親は母親の視聴している番組を幼児と一緒に視聴する割合は低い傾向がみられた。

4) 低学歴群の母親は、食事の際の視聴ありの割合が高く、視聴なしの割合が低い傾向がみられた。高学歴群の母親は、食事の際の視聴なしの割合が高く、視聴ありの割合が低い傾向がみられた。

5) 低学歴群の母親は、テレビは幼児に豊かな情操を養うと考えている割合が高いが、高学歴群の母親は、テレビは幼児に豊かな情操を養わないと考えている割合が高いことが示唆された。

以上の調査結果から、高学歴群の母親は、幼児のテレビ視聴に対して否定的であり、幼児が本当に視聴したい番組を限定的に、「選択的視聴」をさせ、低学歴群の母親ほどテレビを幼児と一緒に長時間「ながら視聴」をしていることが推察される。

ブルデューの文化的再生産の理論 (Bourdieu et Passeron 1979 = 1991) によれば、家族内で相続される文化資本は、学校教育を通じて、「制度化された文化資本」である学歴に転換され、教育選抜システムにおける高い「収益」を生むとされてきた。すなわち、階層的地位の高い家族においては、親から子どもへと、その社会で「正当」とみなされた文化的教養や趣味・知識が伝達される。

今回の調査結果では、母親の学歴が高学歴群か低学歴群かという階層性だけではなく、文化的教養が欠乏している家庭ほど自由な時間を母親、幼児がテレビ視聴をしていることが推察される。文化的教養が高い家庭ほど幼児と共に過ごす時間をテレビ以外の様々な方法で遊んでいる時間が長いのではないかと示唆される。

このことは今後、家庭でのメディアリテラシーの問題も含め、どのように幼児との時間を過ごしていくことが望ましいのかを考えていくことが必要であることを意味している。幼児のテレビ視聴に関する諸要因の研究が進むことで、よりよいテレビ視聴・接触に有益な示唆が与えられることが期待される。

注

- 1) 標本抽出方法に関しては、NHK放送文化研究所、ベネッセ総合研究所の大規模調査と比較及び検討を行うため、サンプル(量)が安定的に取れる承諾が得られた幼稚園に調査を実施した。
- 2) ここで χ^2 検定を行った理由は、期待度数と観察度数との食い違い判断基準を便宜的に設定するためである。

文 献

- 安楽裕里子, 2013, 『幼児のテレビ視聴と録画番組・DVDの利用状況～2013年6月「幼児視聴率調査」から～』 放送研究と調査, 2013年10月号, p44-57.
- 旦 直子, 2012, 『就学前児のテレビ視聴と母親の養育態度』 帝京科学大学紀要, 第8巻, p47-56.
- Foster, E.M. and Watkins, S, 2010, “*The value of analysis.TV viewing and attention problems,*” *Child Development*, 81, p368-375.
- 深谷昌志, 1983, 『孤立化する子どもたち』 日本放送出版協会.
- 服部伸一・足立 正・嶋崎博嗣・三宅孝昭, 2004, 「テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響」 小児保健研究, 第63巻第5号, p516-523.
- 加納亜紀・高橋香代・片岡直樹・清野佳紀, 2009, 「幼児期のテレビ・ビデオ視聴と養育環境の関連」 小児保健研究, 第68巻第5号, p549-558.
- 片岡直樹, 2008, 「子どもの脳の発達へのテレビ・ビデオの影響—テレビによる後天的な言葉遅れの事例を中心に—」 『日本小児科学会雑誌』 第106巻, p1535-1539.
- , 2002, 「新しいタイプの言葉遅れの子どもたち長時間の—テレビ・ビデオ視聴の影響—」 『日本未熟児新生児学会雑誌』 第20巻, p211-216.
- 中井俊朗・西村規子・菅原ますみ, 2010, 「乳幼児期のテレビ接触を規定する要因—“子どもに良い放送”プロジェクト・中間総括報告書から—」 NHK放送文化研究所年報, 第54巻, p295-325.
- NHK放送文化研究所, 2010, 「“子どもに良い放送”プロジェクト 第1-10回調査結果から」 http://www.nhk.or.jp/bunken/research/category/bangumi_kodomo/saishin.html
- 日本小児科学会, 2004, 『提言「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」』 こどもの生活環境改善委員会.
- 齋藤好子, 2008, 「1歳6か月児の精神発達指標、生活およびテレビ・ビデオ視聴時間の関係」 小児保健研究, 第67巻, 第1号, p109-115.
- 佐藤俊樹・藤田真文, 2005, 『放送メディア研究3』 NHK放送文化研究所.
- 関根智江, 2012, 「幼児はテレビをどう見ているか」 放送研究と調査, 2012年10月号, p42-57.
- 菅原ますみ・向田久美子・酒井 厚・坂元 章・一色伸夫, 2006, 「乳幼児期の発達と映像メディア接触との関連 “子どもに良い放送” プロジェクト フォ

ローアップ調査中間報告 第4回調査報告書」NHK放送文化研究所.

武市久美, 2010, 『乳幼児を持つ家庭におけるテレビ視聴に関する研究』東海学園大学紀要, 第16巻, p149-157.

東京都生活文化局婦人青少年部企画課, 1986, 『子どものテレビ視聴の様態に関する調査研究』.

渡辺洋子, 2014, 「幼児のテレビ視聴と録画番組・DVDの利用状況～2014年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査, 2014年10月号, p62-75.

Zimmermann, FJ, and Christakis, D.A, 2005, “*Children’s television viewing and cognitive outcomes,*” *Archives of Pediatrics & Adolescent Medicine*, 159.